特71
649

金魚問答

大日本水産會幹事長　村田保君題字
農商務省水産局長　牧朴眞君題字
大日本水族館長　太田實君序文

301190－000－2

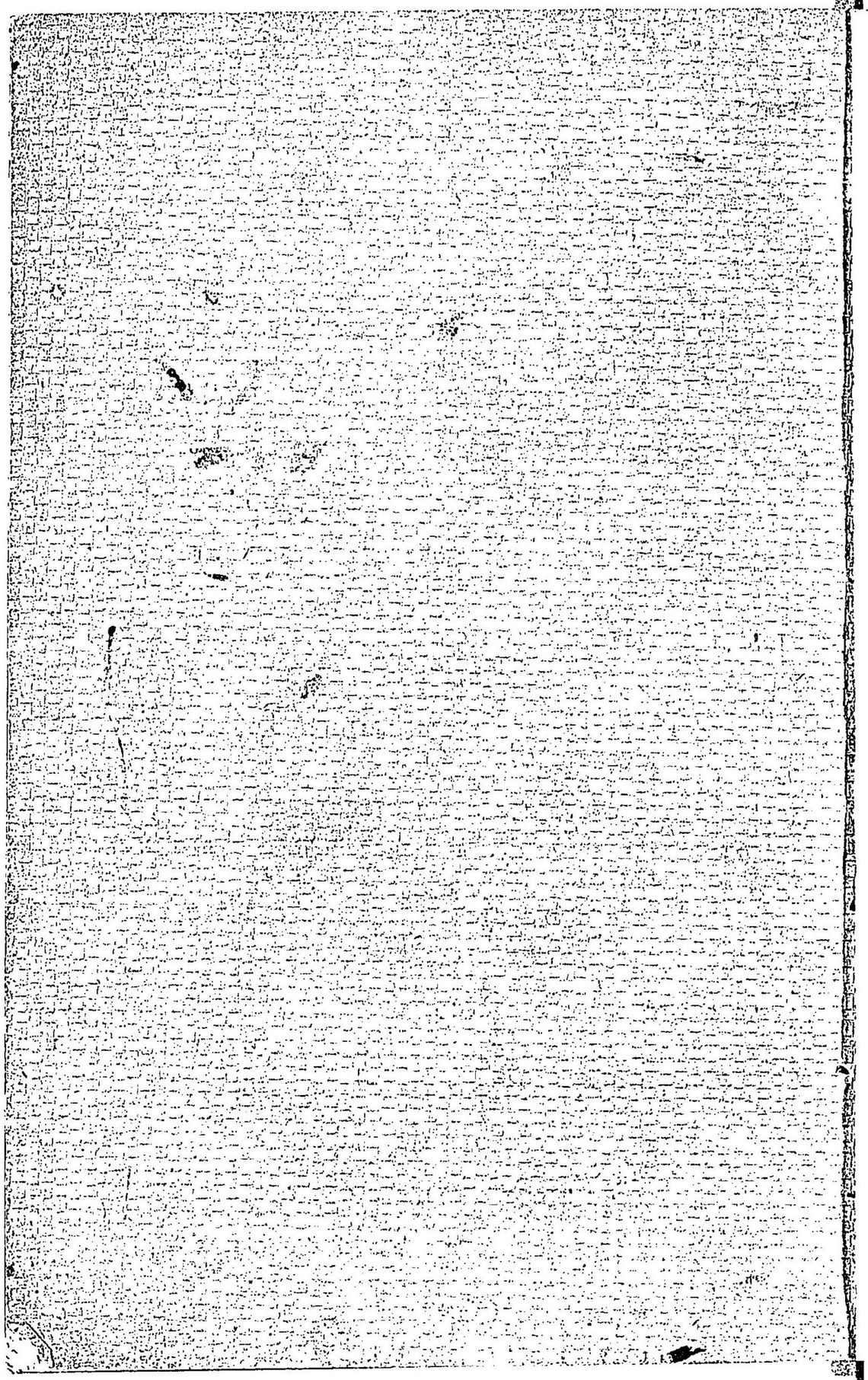
特71－649

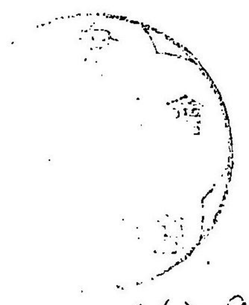
金魚問答

三好 音次郎／著

M36. 5

CEQ－0001





78W13855

道

壬寅九月

水產菊

以知湯樂

壬寅九月雲偉朴志

金魚問答の序

日月の懸る、星辰の羅なる、山の峙だち、川の流るゝ、是れ天地の自然美に非ずや、

花影禽語の春に於ける、綠蔭幽草の夏に於ける、露氣蟲韻玉樓銀海の秋冬に於ける是四時の自然美に非ずや、

而して自然美の人工につよて益其眞美を發揮するもの、其例に乏しとせず、均しく是れ花也、夫の橐駝師の手に養はるゝものを觀よ、色の艷なる、香の濃なる、一枝一葉の微に至るまで疎密各宜しきを得たる、廢園荒草の間に狼籍たるものと、固より同日の談に非らず、均しく是れ美人也、徒に自然美に任せて、鬢髮梳らず玉

肌浴みせざるものを把つて清粧艶服せるものに比し來らば、其優劣果して如何、是に知るを得べし、自然美の固より貴ぶへくして、人工美の決して棄つ可らざることを、

金魚は水中の自然美也、錦梭苒に倣るの姿、繡尺藻に戯るゝの狀益し水中に於ける自然美中の大王也、而して人工によつて其眞美を發揮するもの、想ふに其右に出つるもの莫かる可し、然ども其美を發揮するの術、由來愛魚家の尤も難しとする所、而も世間其術を傳ふるの書に乏し、

金魚問答の一書は、實に這の欽陷を補はんが爲に著述されしもの、其美を發揮するの術を詳にして殆と餘蘊なし、人の解に苦しむを慮るゝ也、故に一問一答を設け、努めて其語を平易にし、婦人童孩だも尚ほ一讀下に曉解せしめんことを期せり、而して記す所の片言隻句、悉く著者が積年經驗の餘より出づ、是を以て乎一も席上架空の譚柄に涉るものなし、著者の勞、又勉めたりと謂ふ可き哉、

若し夫れ、水中の天然美、此の書によつて十分に其眞美を發揮し、天下空前の珍鱗奇尾相續いで出で、水中の乾坤更に幾段の新錦繡を織り出だされん乎、眞箇人工の妙、化工の妙を奪ふものにして、此書に冠するに「天地四時の自然美を補ふ女媧氏」を以てするも亦た溢美に非ざる可き歟、一盆三尺の淺水、解く濠梁の樂を占斷して、江湖と相忘るゝの興味に至ては、愛魚家已に之を悉くす、余輩又何をか贅せん、

明治壬寅三月

東京墨水河畔の僑居に於て

太田實識

金魚問答自序

抑も金魚の由來を尋るに今より前四百年人皇百五代後柏原天皇の御宇文龜二年正月和泉國左海の浦に於て始めて此魚を發見せしに其名の何たるを知らず唯遍躰班紅白にして尾梁の畔りに金色を帶ひたるより號けて金魚と呼ひ做せりと云ふ今の所謂和金即ち是なり爾來飼養して年々歲々之を擴ろめ又巧みに交尾せしめて異形變色せることを發明し遂に元和年中に至り尾長中より脊鰭なく金色を帶ひ尤も優美なる蘭鱓を得たり、天保年中に至り大阪御藏跡町淡路屋宇兵衛(現今大鮫梅太郎氏父)と云へる人尾長を蘭鱓と交はらしめて得たるものは彼の最も優美なる和蘭陀獅子頭なり一說に蘭鱓は朝鮮より渡來せし

ものにて又之を朝鮮とも稱すともいひ又我國の特産物なりとも云へり

又或說に金魚の原魚は支那の産にして毎年奇種を皇帝に貢献せる常例あり且又外國との貿易品となりて倍々其名高くなりたり此魚を歐州に齎らせし人はカエンヘル氏及ひ宣教師チエライデ氏レコムテ等なりといへと其年月詳ならず千六百十一年と千六百十九年の両說あれどもイアルレイル氏の說にては葡萄牙人喜望峰を過きて航路を東印度に開きし後始めて支那より喜望峯に移せるものにして其風土に慣るゝに至り竟にリスボン（葡國都）に輸入したりと又之を畫きしは一千七百十七年にペチーペル氏の金魚圖を嚆矢とす第二は林氏の千七百四十年の畫第三は同氏の一千七百四十六年の畫なり其後一千七百五十一年ヘンナンド氏大に種類を集めて金魚畫譜を作り又千七百六十五年バスラク氏金魚圖說を著したり金魚の異種をサウリグチー氏支那畫に據り書に著せしもの八十九種あり今に至ても歐洲中復た他種を見ずといへり

或は世に金魚を目して徒に豪奢の玩弄物に過ぎずと云ふものありと雖も予が實驗を以てすれは敢へて然らず即ち之を無上養心の術と云ふ可し請ふ試に思へ朝には裳を褰けて池塘を廻り夕には酒を把つて欄に憑る魚儵ち出游して從容す依つて其樂しみを知り興至つては栞を採り一彈再皷す則ち魚悉く前岸に集る以て技を瓠巴と上下し已にして興窮て几に凭つて睡り

夢に魚と化して倶に水上に游泳す以て周子か胡蝶と爲つて紅紫濃艶の中に徜徉遊せると其趣を同ふす嗚呼樂しみ如此ときは心魂常に清淨無垢の境に往來して外邪侵さす竟に以て不老長生の人と爲り優游以て世を終ゆるを得ん卽是人世の一大清福にして彼紫綬金章榮辱常に身に伴ふの人と豈世を同ふして論ず可けんや

予今茲に平昔の經驗に據て其得る所を記述し以て之を大方に問はんとす冀くは大方の養魚家諸君其知る所を以て之れを敎ゆるに吝なること莫れ且此書に依つて些の稗益する所あらは予の幸甚なり

著者しるす

凡例

一本書は現時東西各地方に流行する金魚の品格及ひ飼育方等に關する事實を記載して愛魚家の參考に供せんが爲に作れるなり

一著者は素より金魚商に非らず數年來金魚を愛育せる者なるが資料世に據るべき書なけれは種々の困難に遭遇し多年の經驗を積みて得たるものなり然るに本邦未だ其良書なきを遺憾とし其經驗する所を記し以て之を大方に問はんとす

一書中魚の体格某地方は何某何地方は某と記載せるも決して其魚のみに限るにあらず大体の流行に附て述べたるのみ

一書中土用前後など云ふは夏の土用にして其他入梅或は二百
廿日などの如きは世俗通用せる太陰曆法を用ひたり
一本書は婦人小兒にも通曉し易きを主意とし平易なる俗言を
用ひたり讀者之を諒せよ

金魚問答

山陰米子　延養亭　三好秀知著

總論

抑も金魚は、鮒の進化したるもので在りまして、是れは金魚を愛する人の、豫ねて心得置くべきとであらふと思ひます、併し唯だ一ト口に鮒の進化物と申ては、お分りになりますまいから、其の類例を少々申し述べ、夫より金魚の問答に移らふと考へます、

爰に鮒と申ますは、勿論眞鮒のことで、何れの國にも澤山居る、黒鮒の事であります、

又鮒に緋鮒、白鮒、班鮒等の種類がありまず、是れは天然に出來た

るものかといふに、決してさうでは在ません、天保年間に河内國の某が、眞鮒と金魚とを交尾せしめ、得たるもの即ち緋鮒を始めこしまして、是より白鮒或は班鮒等の種類を造り出したものであります。

又た鮒に、往々胴の短い尾の長いものがありますが是等の緋鮒は、鮒と呼ぶするより寧ろ金魚と云ふ方が適稱かと心得ます、殊に鮒は産れながらに赤白或は班等の魚は在ません、雜魚の時は皆青黑き色で土用前より變色する、始て緋鮒白鮒或は班鮒等の區別が出來ます、是等の場合は金魚と少も違ひは在ません、又た略ぼ似たる鯉の類になりますと、緋鯉或は三色鯉などは皆産れた儘の色で、少しも變色するものでない、是等の点より考へますと、鯉と鮒とは緣遠いものでとが、容易に御了解になりましやう。

その他は唯だ尾の相違で、即ち金魚には三ッ尾四ッ尾の別あれど、鮒は鮒尾なりと云ふ一点で有ますが之れも左の類例に依つて御了解になることゝ信じます。

先づ進化といふことを菊花に就て申ますと、元來菊花も、元と野菊より種々と工夫を加へ造り出したもので在ますが、現今では薄物とて花瓣十六枚の大輪など澤山在ります、其花びら十六枚の花の種を蒔き附けて、生したる菊苗の中より種々と變化して、唯だ花色の變ずるばかりではなく、花瓣百枚以上の厚物も生じます、なほ甚しきに至りますと、野菊其儘の姿の物も澤山生じま

す、是れ即ち原に還るの道理にて、金魚の三ッ尾四ッ尾の親魚より、鮒尾の出來ると同じ理合で在ましやう。

又た一度變化したものは、容易に原に還る事の出來がたいと申す点に就ましても、其例は動物中に澤山在ますが、其中能く分り易ひ例を鼠に付て申しますと、鼠には白黑班のものを通稱白鼠、若くは南京鼠と申しますが、此の白鼠と野鼠と交合せしめ、產んだ子を假りに八正と定めますれば、其中二正は普通の白鼠、二正は茶白班、二正は天鵞絨のやうに眞黑の者、二正は全く野鼠と、大抵斯ういふ割合に變化します、なほ此の場合には何れの毛色の鼠にても同じ道理で在ますが、一例を野鼠に就て申ますれば、右の野鼠の雄雌を合して孫を產む時には、八正中四正は變色の鼠となつて、殘る四正は皆野鼠となります、斯やうにして曾孫玄孫と產む時には、追々變色のものが少くなつて、終には野鼠計りとなります、尤も間に變色のもの一正位を生ずることもあります、それは極めて稀なる例であります。

前陳の道理で、若し之れを茶班ばかりにて產む時は、四五代目には全く茶班鼠のみとなり眞黑ばかりにて產む時は、また同く終に眞黑のもの計りとなるのであります。

斯の如く一度變化したものは、其後の仕向次第にて、或は數代を經て原に還るものもあり、尙ほ進んで益々變化するものもある、と云ふことが判明致します。

又た人工を以て動物を進化させることが出來ると云ふ点に附

ましても確然たる例証があります、之れは隱岐國より産する牛は、往古より何程出來まして
れを隱岐牛と稱へて居ます、唯だ毛色の相違が價格に餘程の關
係を有して、普通の赤毛黑毛牛より安價だといふことでありま
す、然るに或人の工夫で、彼の白黑班の牛の胴体に紅、金巾を卷き
附け交合せしめたるに、幸ひにも赤毛の小牛を生じたるより、其
後は純赤黑を爲し得るに至つたと申します、勿論其術を施す度
毎に出來得ると申譯では有ませんが、兎に角天然で班牛ばかり
出來るものを、人工にて斯の如く變化し得るとせば、これ又一の
參考であります。

以上の類例、即ち菊花の薄物の種より厚物を生ずること、及び一

度變じたるものは容易に原へ還らぬと云ふ鼠のこと、或は人工
を加へて牛の毛色を變ずる場合等を考ふる時は強ち鮒尾より
三ッ尾四ッ尾の魚が出來ぬとは申されますまい、既に動物に明
るい理學博士兵淺二郎君も、金魚は鮒の進化物である事を講義
して居られます。

現に、予が試驗の爲め種々と工風を爲た結果、二種の變り物を得
ました、一つは鮒の腹より生じたる三ッ尾四ッ尾の魚であり
ますが、之れを愛魚家に鮒の子であると申して示したのに、誰
も眞とは致しません、決して信用せんのでは在ませんが、兎に角
三ッ尾四ッ尾の鮒を見たことがないからと言つてそれを楯に
取り強て金魚であると云ふのであります。

又た現在金魚の腹より産れた赤無地の鮒尾の金魚を示すに之れぞ全く緋鮒なるべし抔と申します。

右の如く鮒の腹より出て鮒の子に相違なきも彼等進化を爲して三ッ尾四ッ尾と成たる爲め人之れを呼んで金魚と云ふは實に無理な話でありますが若し彼れ等に自由發言を成さしめたならば三ッ尾四ッ尾は金魚殿の專有物ではない。

海王と稱せらるゝ鯨殿も三ッ尾四ッ尾を所有せらるゝ者澤山ある我等は餘程辛勞なした爲めに三ッ尾或は四ッ尾を持つて産れたる進化の鮒に候と申すで有ましやう。

此の話は今少し前に述べるのが順序で在ますが併し突然鮒の腹より三ッ尾四ッ尾の魚が出來たと申ては疑ふ方々が多からふと心得前述の如く諸例を掲げ畧ぼ御了解に成りましたところで話し始めた譯であります。

今一ッの變物と申すは眞黒の蘭鯺であります併し眞黒と申ても是れ迄世に有ふれたる彼の鐵魚と稱する魚では在ません彼の鐵魚と稱する魚は普通青子の類であつて三年位變色せずに其儘雛子の色を保ち居るものが往々あります之れを即ち鐵魚と申まして若し變色すれば普通の金魚であります言換れば變色の遲き魚と申す外はありません。

又此類の魚は器に隨ひ色が異つて見へます例へば黒き器に入るれば黒色に見ゆるも白き器に移せば隨て白く見へます。

又予が拵へました眞黒の蘭鯺は黒き器に入れて黒く見ゆるは

當然で在ますが之れを白き器に移しても、なほ眞黒の本分を顯し、胴体は勿論のこと尾鰭先に至る迄、宛がら烏の濡羽色のやうな魚でありまず、此色に限り終身變色は致しません。

是れは彼の鼠の例に倣ひ、予が積年の工風其功空しからず、本年(明治三十四年)に至り三尾の魚を得ました、最早彼の鼠の例に徴するも、眞黒の蘭鱚と云ふ一種類が、世間に廣まる事は確であります。

以上は鮒の話のみにて切上げ、更に金魚の話を述る筈でありましたが、成行上金魚の話に少し喰入ました、併し是より改めて金魚の問答に移ります。

金魚問答

問　金魚之種類は何程ありや

答　和金、尾長、蘭鱚の三種とす、尤も近來ハワイ國より渡りたる出目金(一名支那魚)と稱する一種あり、其他のものは皆此の三種より變化せしめしものなり

問　變化と申すは如何樣に變りたるものありや

答　蘭鱚に尾長を交尾せしめ得たるを和蘭陀と云ふが如き又國々の流行により魚の姿も多少異り隨て名稱も差異あり東京は蘭鱚を丸子と云ひ尾長を流金と云ふ大阪地方は蛙頭の尾長を長崎と云ひ獅子頭の尾長を和蘭陀と云ふ四國

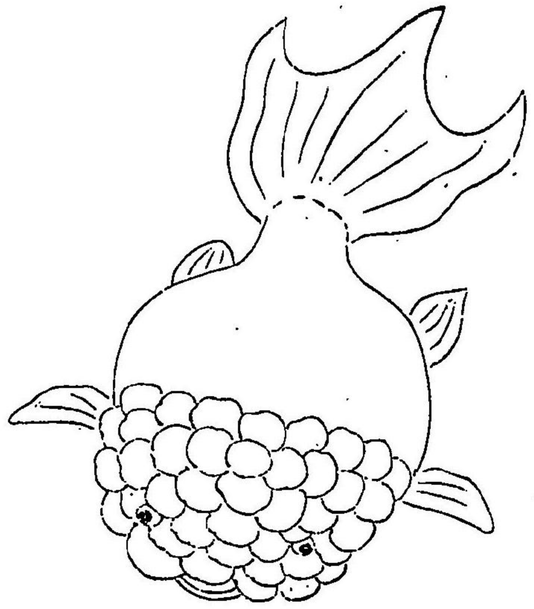
問答

地方は尾長をトン金と云ひ又名古屋の如きは專ら和金を愛し單に金魚と稱するは和金の事なり

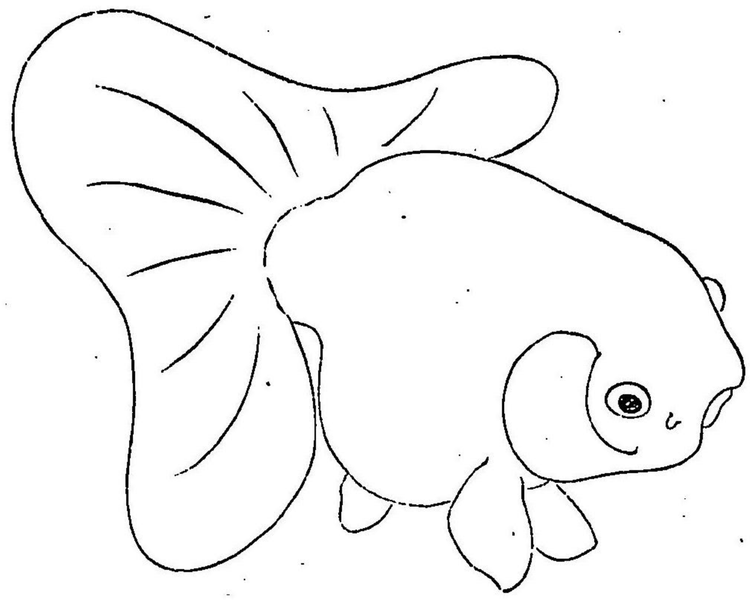
其他蘭鱗を南京と云ひ又は朝鮮と云ひ尾長を和唐内と云ふ鳥取市の如きは尾巾廣き尾長を丸尾（三ッ尾四尾に拘らず尾巾廣く且つ尾の切れ込少きが故丸形の尾なりと云ふ意なり）と云ふ

姿の差異ある説明を乞ふ

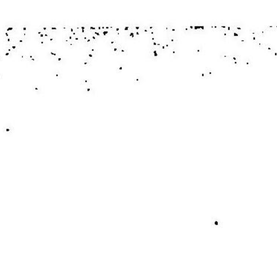
先つ蘭鱗にて申せば東京の丸子蘭鱗は左圖の如く顔幅廣き獅子頭にして胴稍々長く尾筒太くして尾短く宛から小判の如き姿なり



大阪地方の蘭鱗は圖の如く獅子頭にして胴短く尾幅最も廣き魚なり



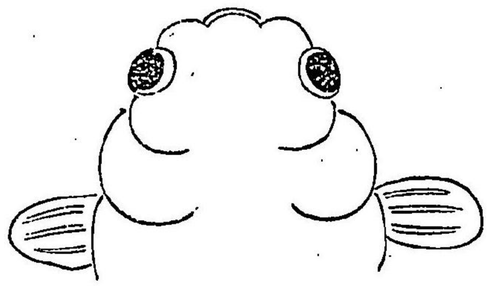
又同地は數年前迄は
胴一寸に對する頭よ
二三分位の格好をな
しも此の魚は虛弱な
りの癖あり故に追々改良し前記の如き姿のものに成した
りと云ふ



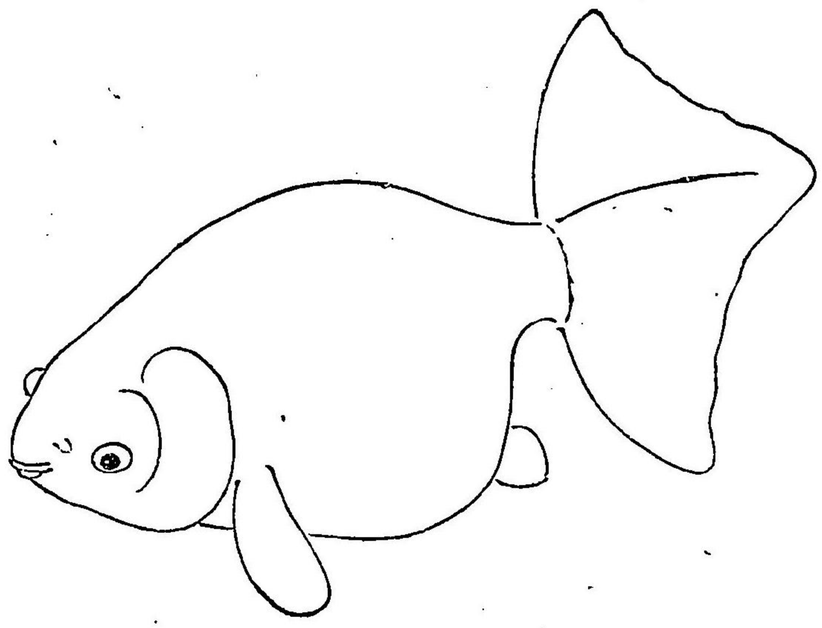
圖の如き獅子頭にて
り尾の附根まで一寸
し尾幅廣き魚流行せ
るものにしてウップ

又廣島地方の蘭鱚は
たるも圖の如き上に
幅狹き獅子頭にして
又四國地方の蘭鱚は
獅子頭にして胴体は大阪流行魚に略ぼ似たる姿なり

東京の丸子に略ぼ似
のみ盛り揚げたる顏
幅筒稍々長き方なり
圖の如き顋の張たる

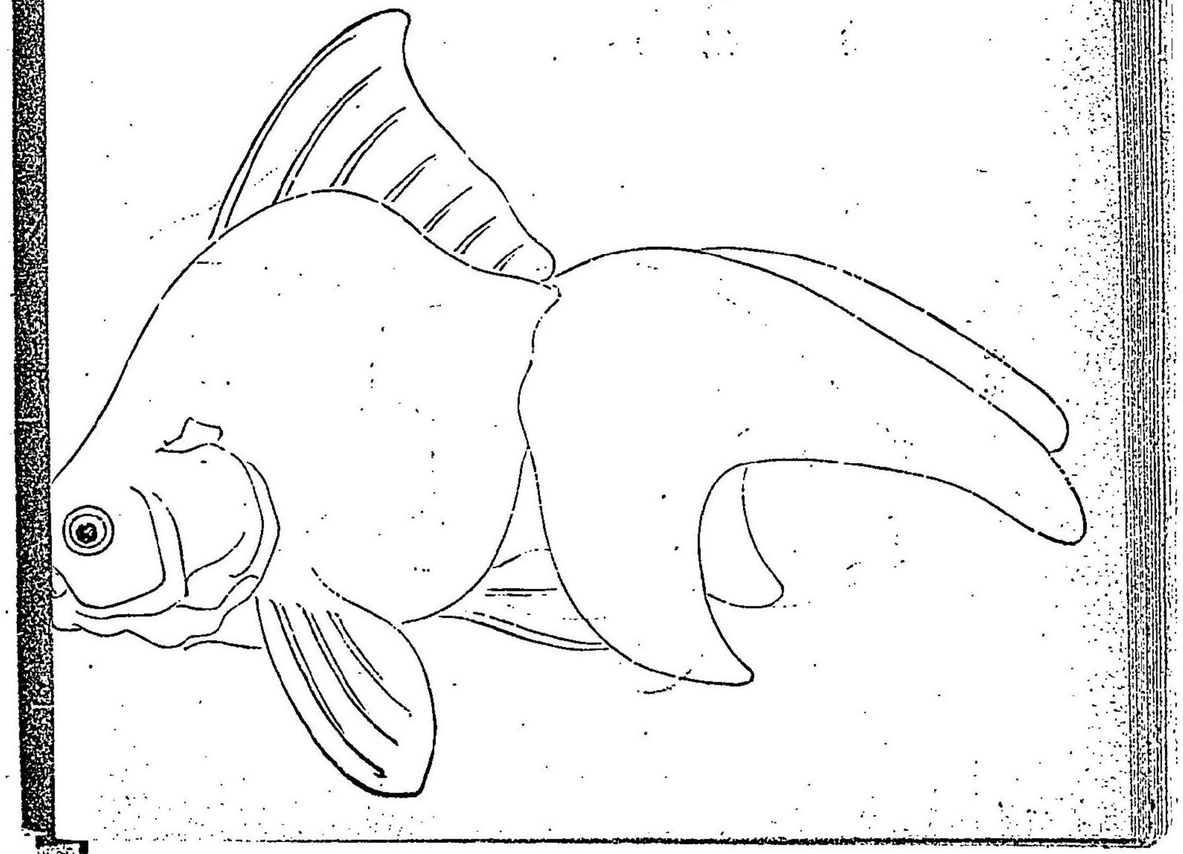


其他各地の流行により種々
なる姿の魚ありと雖ども之
れを畧す
先づ普通の蘭鱚は圖の如き
姿の魚多し



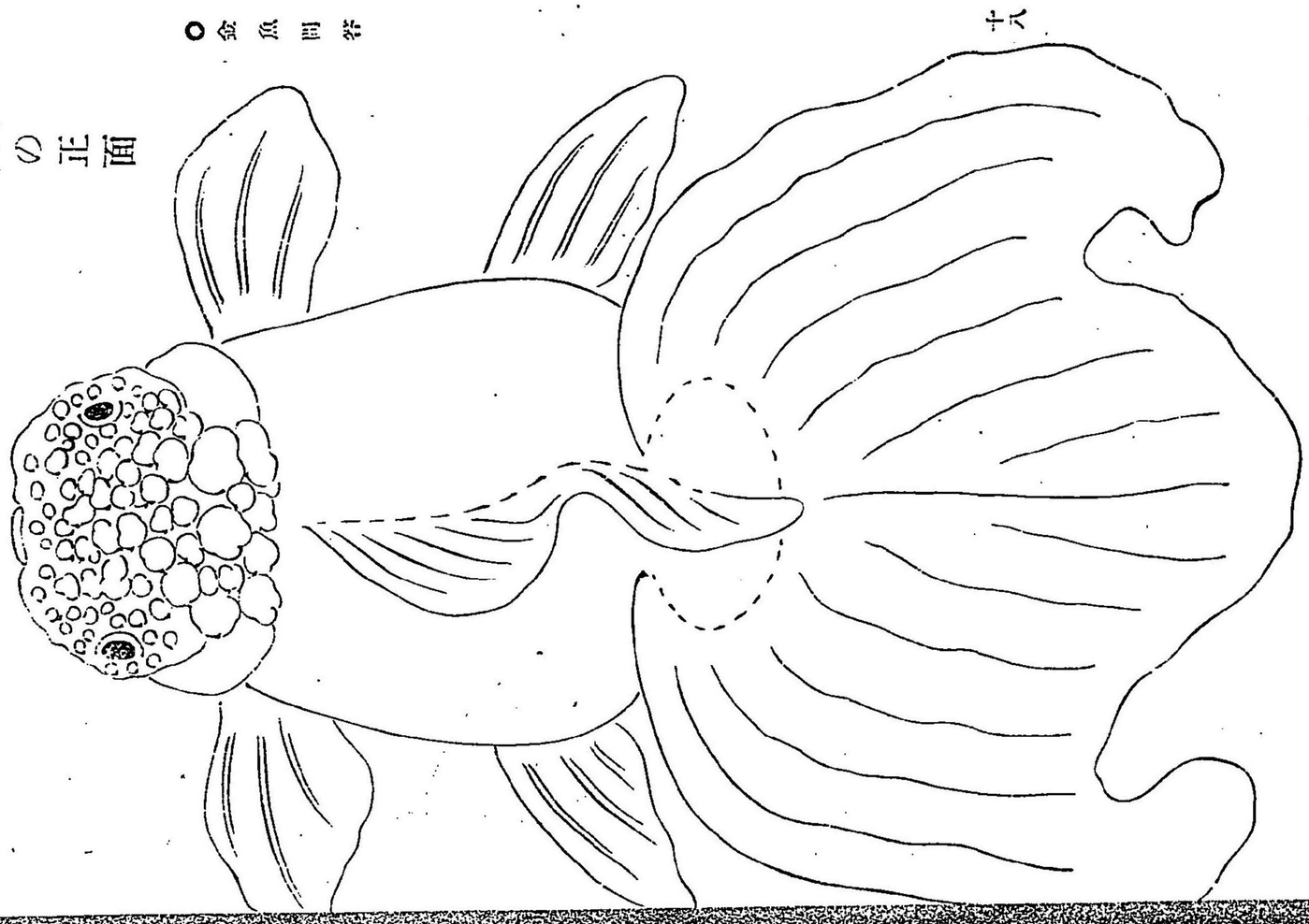
尙又尾長類にして申す時は東京の流金は(い圖)の如く狐頭にして胴短く充分肥滿し尾又長き魚なり大阪地方は(ろ圖)の如き獅子頭の尾長を和蘭陀と稱し(は圖)の如き蛙頭の尾長き胴長魚を長崎と云ふ此の魚は和金の尾を長くしたる如き姿なり

(い)



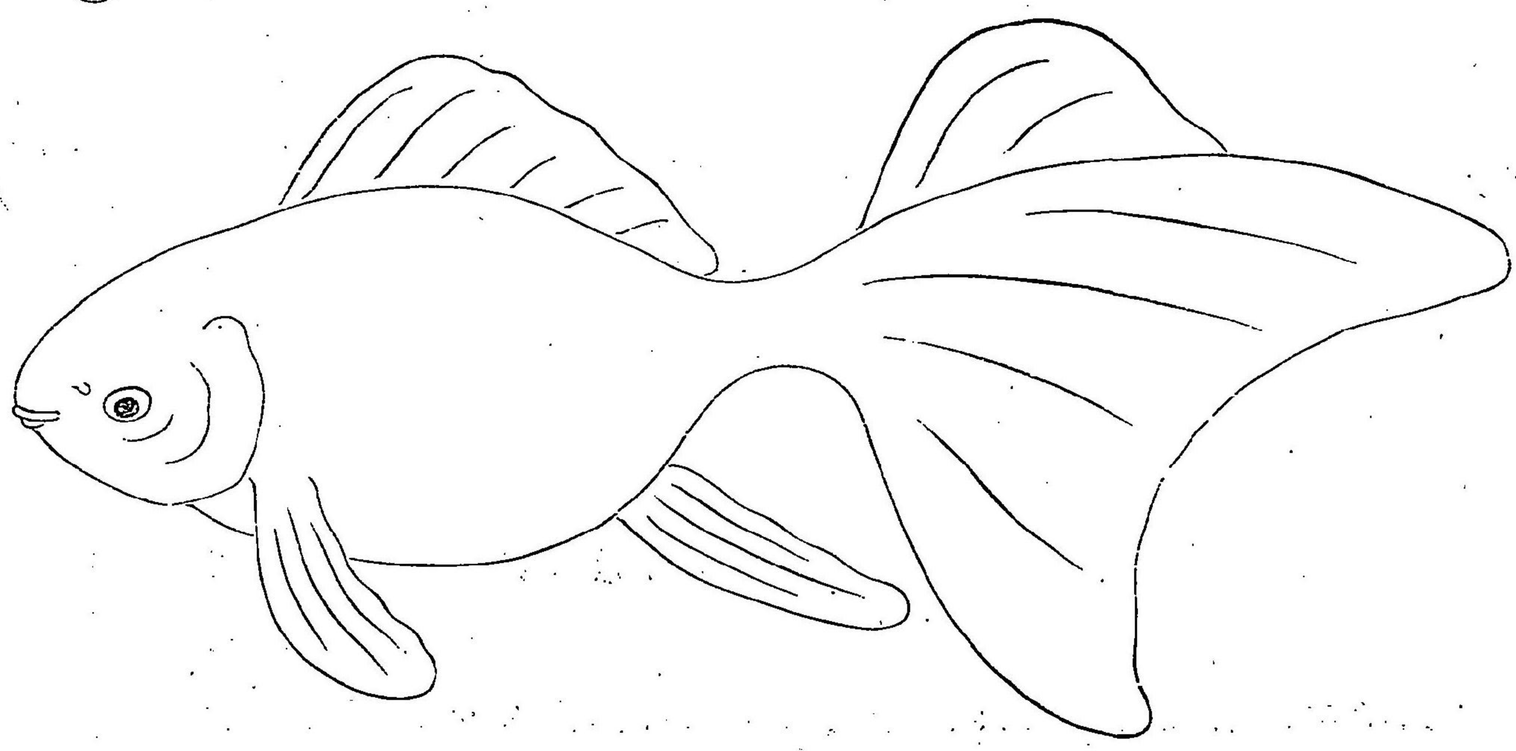
(ろ)の側面

(ろ)
の
正面

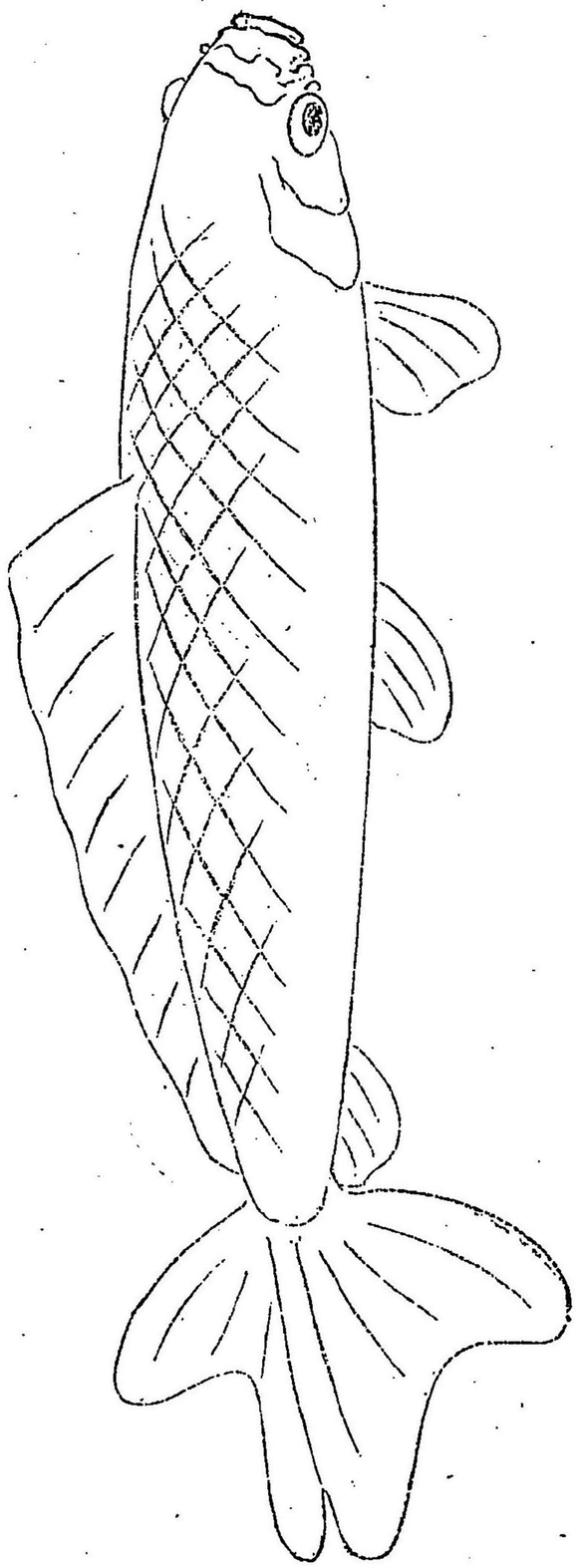


○金魚問答

(は)



○金魚問答

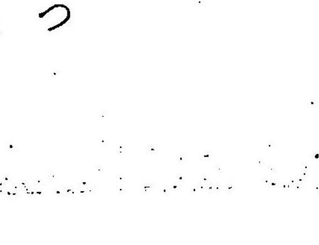


其他四國のトン金或は和唐内抔云ふ魚は畧ぼ同姿なるを以て之を畧す

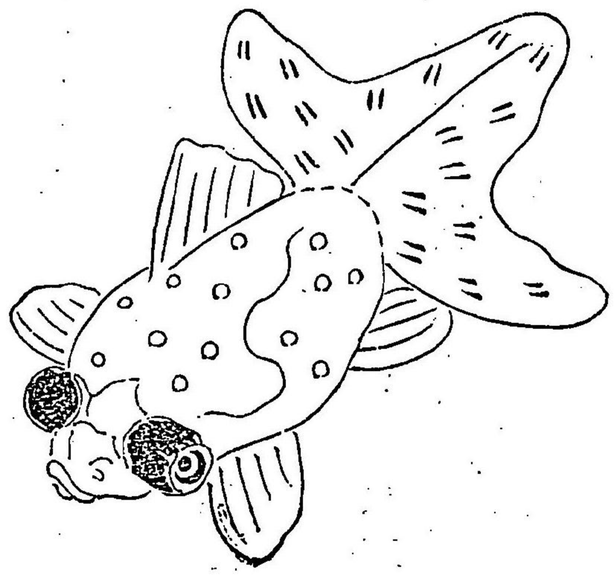
又和金は圖の如き姿なり

且つ又彼の出目金一名支那魚なるものは下圖の如く眼巣殊更に突出し宛も雙髻鯊（しもくざめ）又はかせぶか）の如き姿なり

因に記す安政年中迄は鳥取市にバラ尾と稱する一種あり



たり即ち圖の如く獅子頭にして尾短く尾の長き



ことなり言換ふれば尾は胴に一倍の比例なり現今是種の魚と胴一寸に尾は二寸の割合を保つ

絶ゆ遺憾と云ふべし

問 魚の体格優劣如何

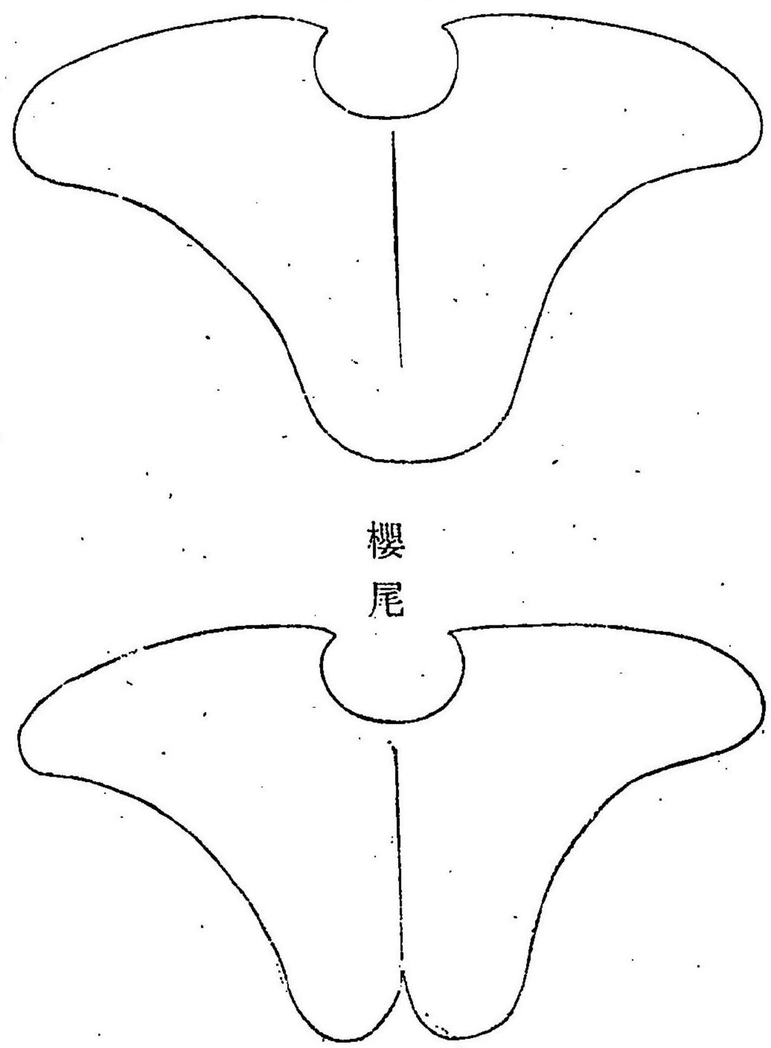
答 体格に至りては前に述べたる如く國々流行の差違もあれば一様に評し難き場合あり然れども其原は唯だ三種より成立たるものなれば先づ全体に就き説明すべし

第一頭は顔巾廣き獅子頭（東京の流金に限り頭の極小なる丈けを最上とす故に本魚は別段と知るべし）にして胴短く肥滿し尾筒太くして尾幅廣張する方を可とす殊に蘭鱓尾長二種の如きは假令ば頭より尾の附根迄二寸ある者と假定せば之れに對する胴幅一寸三歩以上ある魚を合格とす

問 尾の優劣如何

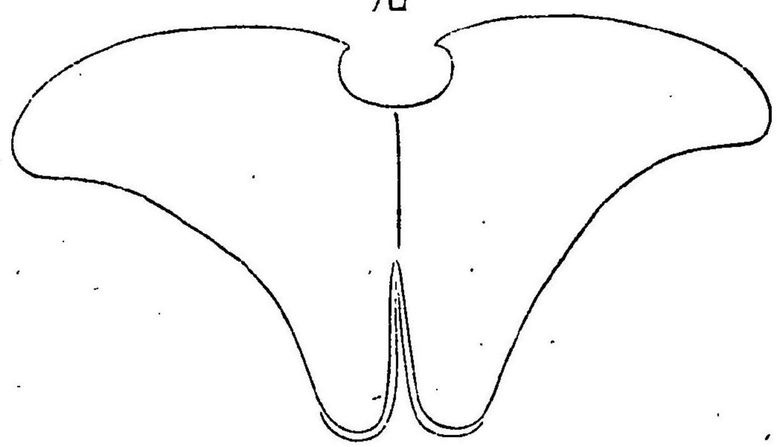
答 尾は

三ッ尾
一名
丸尾

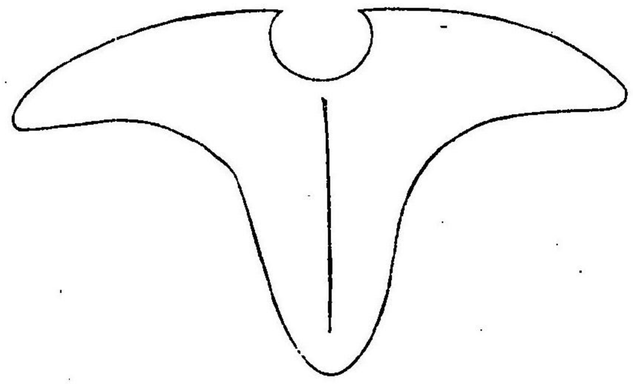


櫻尾

四ッ尾



圖の如き優等の者三種ありと雖ども其中三ッ尾を第一とし櫻尾を第二とし四ッ尾を第三とするの順序なり又圖の如き切れ込み深き尾あり又

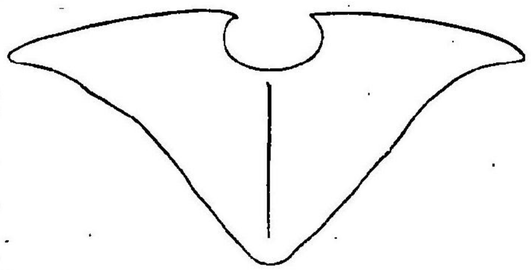


圖の如き三角形の尾あり之れを海老尾と稱す之れ等は共に劣等なり

其他何尾たるに拘らず前後左右に引附け又は釣上げたるもの或は張の狹き尾右と左の同じからざるもの及び鮒尾等は皆不具物として論外なり

問　班の說明を乞ふ

答　班は第一口第二眼巢第三髭第四兩頤第五諸鰭第六尾以上第一より第六まで皆赤くして尙ほ腹部より尾筒へ赤色卷上げ頭部より脊筋の邊り白き魚を合格班とす又之れに反し第一より第六迄の赤色を欠ぎ頭部より脊筋



を赤くし腹部の白き魚を劣等の班とす
茲に參考の爲め大阪流行の班名を左に記す

蘭鯨摸様

口 紅
鼻 髭
目 赤
両 奴
六枚 梶
尾 紅
丸 金
尾

本六輪道具揃
別品
本國錦

口 紅
鼻 髭
目 赤
両 奴
六枚 梶
尾 紅
丸 金
尾

半身赤半身白
染分錦

口 紅
鼻 髭
目 赤
六枚
尾 紅
丸 金
尾

本六輪無髭奴
白紅錦

口 紅
目 赤
六枚 梶
尾 紅
丸 金
尾

白玉六輪

口 紅
目 赤
両 奴
六枚 梶
尾 紅
丸 金
尾

頭道具揃

別品

陽貴妃

口　紅
鼻　髭
目　赤
両　奴
腹　摸様
尾　紅
丸　金
丸　尾

別品

鳳凰錦

口　紅
鼻　髭
目　赤
両　奴
六枚梶
腰尾紅
丸　金
丸　尾

緋ノ袴道具揃

乙女姿

口　紅
鼻　髭
目　赤
六枚梶
腰尾紅
丸　金
丸　尾

緋ノ袴

官女

口　紅
目　赤
六枚梶
腰尾紅
丸　金
丸　尾

頭無道具

緋ノ袴

腰尾紅
六枚梶
口紅
鼻髭
目赤
丸金
丸尾

別品 道具揃一枚鹿ノ子 両奴

皇國錦

六枚梶
鹿ノ子
尾紅
丸金
丸尾
口紅
鼻髭
目赤

別品 壹枚鹿ノ子 道具揃無奴

立田川

口紅
鼻髭
目赤
六枚梶
鹿ノ子
尾紅
丸金
丸尾

壹枚鹿ノ子 道具揃無奴髭

紅葉錦

口紅
目赤
六枚梶
鹿ノ子
尾紅
丸金
丸尾

頭無道具

壹枚鹿ノ子

口　紅
鼻　髭
目　赤
兩　奴
六枚梶
鹿ノ子
丸　金
尾　紅
丸　尾

本六輪道具揃

別品

瀧紅葉

口　紅
鼻　髭
目　赤
兩　奴
六枚梶
兩腹鹿ノ子
尾　紅
丸　金
丸　尾

本六輪道具揃

別品

織姫

口　紅
鼻　髭
目　赤
兩　奴
六枚梶
腰鹿ノ子
尾　紅
丸　金
丸　尾

本六輪道具揃

別品

吉野山

口　紅
鼻　髭
目　赤
兩　奴
六枚梶
飛鹿ノ子
尾　紅
丸　金
丸　尾

別品 頭道具揃 白王冠

口　紅
鼻　髭
目　赤
丸　丸　首ノ下皆紅
丸　金
丸　尾

頭無道具 白冠

口　紅
丸　金
首ノ下皆紅
丸　尾

緋ノ兜

頭　銀紅
六　枚梶
尾　紅
丸　金
丸　尾

本六輪道具揃 別品 源平錦

赤白珀
口　紅
鼻　髭
目　赤
両　奴
六　枚梶
尾　紅
丸　金
丸　尾

口　紅
鼻　髭
目　赤
両　奴
紅タスキ
六枚梶
尾　紅
丸　金
丸　尾

本六輪道具揃
別品
玉タスキ

口　紅
鼻　髭
目　赤
両　奴
紅タスキ
六枚梶
尾　紅
丸　金
丸　尾

本六輪道具揃
別品
紅ノ横引

口　紅
鼻　髭
目　赤
両　奴
六枚梶
尾　紅
丸　金
丸　尾

緋兜胴巻

頭　紅
胴紅白一筋
六枚梶
丸　紅
尾　紅
丸　金
丸　尾

立浪鹿ノ子

口　紅
両　腹
飛鹿ノ子
六枚梶
尾　紅
丸　金
丸　尾

問　魚發育の度合は如何

答　當年子にて二百三十日頃迄に量目凡そ二十匁内外とす尤も骨太の魚にて養育其の宜しきを得れば四十匁許りまで進むことあり又最後には長さ凡そ一尺許り目方百三十匁乃至百八十匁許りに至るものあり

但し東京の流金並に彼の出目金の如きは最後に目方三十匁許長さ四寸位とす

又四國のトン金は最後に長さ二尺五寸位迄延立つ種類なり

問　餌の種類並に之れを與ふる方法は如何

答　餌は小紅虫（アカ）之れを東京は糸ミミ大阪はモヽホヽツキと云蚊虫ミジンコ又干魚鹽魚類或は貝類又は生素麺等なり其他種々あるも餘は畧す

又之れを與ふるに生餌類と素麺は其儘にて與ふるを可とす又鹽魚は水煮にして與へ貝類及干魚の類は能く潰し細かに刻みて與るなり

問　餌を與ふる時間は如何

答　四月より十一月迄は毎朝午前中に喰盡す丈けの見込を以て與へ若し午後三時頃に至るも殘餌ある時は之れを取除くべし尤も小紅虫蚊虫ミジンコ等は此の限にあらず

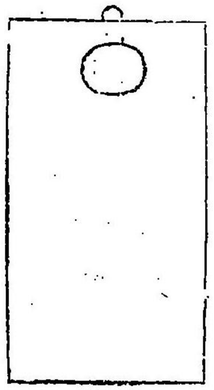
又十二月より三月までは入れ通しにて差支なし

問　泉水を造るには如何なる場所を適當とする乎

答　日受けよく且つ空氣流通最も宜くして尚ほ東西南の三方を廣くし北一方の塞りたる場所を適當とす

問　泉水は如何なる格好を便利とするや

答　泉水構造の節は凡そ竪六尺横四尺深さ（上八寸下九寸位とし水は六七寸にて充分なるも金網を蓋ふ時は三寸位空所あるを可とす）位の比例を以て造るべし又左の圖中呑口の前に鉢形に深さ五寸位の水溜を拵らへ置くべし尤も魚の大小或は魚數の多少により泉水の狹廣は適宜なるも格好は右申す如く造るを便利とす



問　新設の泉水にアク出しを爲し直に放魚するも妨なき乎

答　新に塗たる泉水は一週間位毎に水換を三四回爲すべし暖氣の候なれば泉水に青色を生ずべし此の時放魚するを可とす

問　如何なる理合を以て泉水に青み附たるを可とする乎

答　水中に炭素と酸素のある事を知るべし而して總て動物は炭素を呼き酸素を吸ふ又草木類は之れに反し酸素を呼き炭素を吸ふものなれば青み附たる泉水に放魚せば炭酸の交換を來し魚の爲めに可なると知るべし

又新設の泉水に直ちに放魚する時は鰭を摺り魚に痛みを生ずることあり

問　川水と井水との可否如何

答　川水は魚の赤色引立たざるを以て井水を用ゆるを可とす

問　汲立の水に放魚するは如何

答　新水に放魚する時は魚餌食せず故に一夜溜め置き明日放魚すべし

問　水換は何日目位に爲して宜しき乎

答　四月上旬より十月下旬頃迄の間は放魚の日より毎日四五時頃（日入前を可とす）に全水の二割を取捨指水を爲し而して水面の浮泡を巻藁又は其他の工夫を以て巻取るべし氣候の變動により一樣ならざるも四日目（水青くなるときは可し赤く見もる時は惡しゝとし）より乃至七日目の中見計らひ水換へすべし

又十一月より翌三月末迄は十日目乃至十五日目位に水換して可し又寒中は水換に及ばず

但此の間に對しては大畧を答へたるものに過ぎず何となれば入梅より極暑の候に至れば氣候の變動劇くして例へば同一の井戸より三時に汲取りたる水は四五日間効用を爲すも四時に汲たるものは一日も捨置き難き場合等あり此の水質見分けは筆舌に尽し難し唯だ經驗と云ふ外なし

茲に暑中大丈夫の一談あり甲の泉水水換の時期に至り魚を乙の泉水へ移し甲泉水を其儘に捨置く時は種々なる虫を生じ水は一度腐敗を來すなり之れを三十日以上留置な

ば再び清水に返るなり此の時他の泉水を能く洗ひ之れに該水を木綿にて漉し入放魚する時は新に水換爲したる水より魚の爲には宜しきも多數の泉水を要する故行ひ難かるべし

注意暑中新水の當時より毎日指水を爲し來り既に水換時期に至るも多用の爲め水換爲す能はざるときは多量の指水を爲し一日位引延すも差支なし若し之れに反し新水の當時より指水を爲さず既に水腐敗し水換時期に至り初めて多量の指水を爲し水換を怠る等の事あるべからず已むなくば其儘にして引延すべし腐敗したる水へ多量の指水を爲す時は腐敗の反動一時に來り一夜中に魚皆死することとあり養魚家は豫て心得置く可し

問　水に魚の分量如何

答　目方拾匁以下の魚なれば一坪の泉水に拾尾以下三十匁以内の魚なれば五尾又五十匁以上の魚は二尾位の割にて差支なし尤も魚數の少き丈けを可とす

問　冬期に至り圍の法は如何

答　冬圍と申しても別に取扱方に違ふことなし併し圍ひと云ふ事につき平日の心得方を併せて說明すべし

豫て猫馳或は河鼠等を防ぐ爲め六步目の金網を泉水直接に蓋し置くべし而して極暑の候は葦簀を泉水半分位に覆ひ又十一月より四月下旬迄は夜中は雨障子を覆ふべし尤

も金網と雨障子の間に三寸位の枕を入れ空氣流通の宜し
き樣注意すべし又雪中は雨障子の上に竹簀一枚を覆ふも
可し又寒中と雖ども天氣の日は障子を除き日光を導き入
れて暖むべし之れ全く改良法なり

問　一說に金魚は冬期に至れば食事を爲さず十一月頃より泉
水に板或は竹簀を敷き其上へ鹽俵の如きものを以て充分
包み成るべく寒氣に觸れざる樣圍ふなりと此の法如何

答　該法は一般取扱ふ所の有樣なれども舊法にして其害多し
則ち改良と舊法とを對照して其利害を左に說明す
改良法は空氣の流通宜くして寒中と雖ども餌食を爲すが
故魚は發育し無病なること又天然の氣候に隨ひ居るを以
て翌春發病の恐れなし

舊法は空氣不流通加ふるに餌を與へざるに依り魚の發育
は暫く措き旣に圍中に白ソブ黑ソブ其他の病を發し又天
然の氣候に違ふが故翌春餌附けの時立鱗其他の病を發す
る事あり

改良法は予が積年の工夫を以て例を蠧種の寒水に浸すに
做ひ或は動物の食事を爲すは當然なる理合又野ものにし
て天の與ふる氣候に隨ふの場合等を考へ實際を試驗し好
結果を得たる法なり

問　雄雌を見分ける法如何

答　金魚の雄雌を見分るに就ては種々なる說あり魚の姿に依

○金魚問答

りて見分ると云ふあり又は魚の腹部を撮み堅きを雄柔きを雌と鑑定すること等ありといへども是等は皆無責任の推量と云ふべし何となれば雄魚にして飼育宜きものは充分肥滿して腹部柔らかなる魚あり又雌魚と雖ども憔悴飼にする時は雌の如き姿となり隨て腹部堅き魚あり之れ前法にて鑑定する能ざる理由なり

今茲に外國人自國にて産卵さするの目的を以て當歳魚を雄雌保險附とし高價に買取り持歸る場合と假定せよ所詮前法にて鑑別することと難かるべし

責任を以て雄雌の鑑別する法は唯だ糞の小筋なるを雄魚とし雌魚は大筋なる糞を引くを以て見分る一法あるのみ

該法に依て判斷するときは少しも違ふ事なし

又金魚は雄雌交合抔云ふといへども決して姪部を以て交合するものにあらず唯顋を摺合せ互に相感すると同時に精液を注射するなり故に一尺の雌魚に一寸の雄魚を合すも又尺の雄魚に寸の雌魚を合すも共に差支へなし

産卵に關する説明を乞ふ

先づ親魚と成すべきものは最も上等の雄雌魚を九月頃より大切に養育し置くべし而して翌年五月上旬に到り川の泉水を極めて清潔に水換なし置き其翌日松藻或は櫻欄の毛又は柳の根等を入れ置き之れへ親魚の雄雌を放つなり若し雄魚泉水の縁へ頭を摩る時は其當日産卵するなり若

○金魚問答

し氣候の模樣により斯の如くなさゞる時は他日雌魚の泉水緣へ近寄るを見て産卵の兆あるものと知るべし

問　産卵を爲す時は如何なる容体を爲す乎

答　前述の如く雌魚泉水の緣へ頭を寄す時は雄魚之れを逐ひ而して雄雌共に藻中へ入込み脊鰭を立て（菌鰭はなし）頭を並べ顎を摺合せ勢よく飛去ると同時に卵を振出し居るなり而して多數の卵を要するものは彼の漬け置きたる松藻の類と共に卵の附たるを見て別の泉水へ移すべし左なくば凡そ二時間位其儘に捨置親魚を別の泉水へ移すも一法なり

問　親魚は何年魚を以て適當とする乎

答　二年の親魚は其雛子尾節弱きもの多し又老たる親は其雛子壯健且つ尾節張つたるもの出來得るも産卵の數少きが故先づ三年魚より四五年魚を種最中とす

問　金魚は何番子迄産卵する乎

答　何番子採と申分くべきものにあらず唯だ其人の考を以て四月中旬より産卵さする時は五月上旬の産卵は既に二番或は三番子ともなる順序なり然れども餘り早く産す時は寒さの爲め雛子を失ふことあり故に先づ八十八夜即ち五月上旬を適當とするなり又産卵の後親魚を充分養育するときは凡そ七八日乃至十五日目位には次の産卵をするものなり又産卵の期は四月中旬より八月中旬頃迄とす

問　雛子發生の時の取扱方如何

答　發生後三日目に鷄卵一個を湯煮し其黄身を（一坪の泉水と假定して）十分し其一部を餌摺にて克く摺潰し之れに水一升位を混和し黄水と爲し之れを水嚢にて漉し而して該黄水を如露にて雛子を入れたる泉水へ灌ぎ込むべし斯の如くすること一日に二三回

問　又四五日目には別の泉水を水換し之れに彼の松藻或は櫻櫚毛又は柳の根等を所々に配り置き之れに雛子を茶碗の類にて水と共に匕ひ移すべし又水換毎に魚の大小を撰別し泉水を分ち尚ほ不具なる魚は見當り次第取捨べし此の如くする事三四回にて他の餌に換るなり

問　松藻或は其他のものを何故泉水の中に配り置く哉

答　雛子は發生當時は鯰の如き頭張りたる不格好の者にして游泳自由ならず故に松藻其他のものを入置く時は宿として之れに捉むなり

但他の餌に換ると同時に之れも取除くべし

問　黄身は何日位與へ其後は如何なる餌を與ふる乎

答　凡そ黄身を與ふるは十五日或は廿日間位其後はミジンコ或は小紅虫を細末にして與ふるも可し

問　魚の姿を造る時期は如何

答　發生後三十日頃迄は竪に延長する一方にして不格好なるも後は追々横に張り變色前までに充分なる體格を作り變色後は魚体に幾分か憔悴を來すものなり

問　變色するは何月頃なる乎

答　魚により六月中より九月中旬頃迄とす而して青子の黒色を帶るときは變色にかゝりたるものと知るべし

問　變色一切の説明を乞ふ

答　元來金魚は赤色を本分とす故に十中の七八は皆赤色に變するなり而して赤は陽の色なるを以て壯健なる魚之れを帶ぶ又た魚体にて云へば背部を陽の体とし腹部は陰の体とす又白魚を銀魚と稱す白は陰の色なるを以て虚弱なる魚之れを帶ぶ

右に述べたる道理で早く變色する魚は虚弱にて雜色を永く保つに力なく体格不充分なるに拘らず變する故白色多し壯健なる魚は永く雜色を保ち充分なる体格を作りたる後變ずるを以て其の本分たる赤色となるもの多し

さて此の場合に愛魚家の望む處は白にも非ず赤にも非ず殊に反對なる陽体に陰色を帶び陰体に陽色を置たる班之れなり（委細は班の説明並に雜話中に詳かなれば爰に畧す）

問　魚に病の種類は何程ある乎

答　白ソブ　黒ソブ　立鱗　眼ムキ　血走リ　尾ナヘ　顋腐レ　脊干　不注意　ペスト病等を重なる病と知るべし

問　白ソブ病と云は如何なる病体を爲し且つ發病の原由如何

答　最初魚体に白星の如きものを生じ追々廣張して重病となる時は魚体を打繩にて巻きたる樣の格好となり終に死す

るなり該病は傳染病なれば充分注意すべし

又發病の原由は種々ありといへども冬圍不注意の爲め或は日當り惡しき爲め又は空氣不流通等重なる原由なるべし治療法は淡鹽水にて一日に二三回洗ふべし

問　黑ソブ病如何

答　黑ソブ病と云ふは魚体に墨を塗りたる如く見ゆるなり此の病原は寒中の冷へ込み暖氣に向つて發するなり併し該病は日當り宜き場所に置く時は自然と治するなり

問　立鱗病とは如何

答　此の病は暖氣に向ひ多くは魚の兩腹部の鱗逆立宛も松毬の如き姿と爲り而して鱗の合間より薄茶色のヤニを吹出し徽菌を生ずるなり此病原は種々あり先づ糞塞り或は産卵發生の傷又遠國より運送なしたる魚途中自然の摩擦より翌年暖氣に向ひ發するもの其他取扱の荒くして自然の打身等より發することあり本病は兎に角腫病にして腹内に異狀なきものゝ如し故に重病の魚と雖ども食事を成し又活動も能くす此病は傳染せず

問　其治療法如何

答　本病は日受けよき泉水を極めて清潔にして放魚し三日目又は四日目には是非水換を成し餌は小紅虫を與へ又水換の節綱を當ること無用なり器を以て水と共に甲泉水より乙の泉水へ移すべし此の如く取扱上萬事に注意し入梅氣

節を無難に經過せば自然に治するなり若し痛部の再發を來す魚は治療の効なきものと知るべし

問　眼ムキ病は如何なる病體なる哉

答　本病は泥池飼に限るなり該池水餘り肥氣强き爲め發病す故に魚の眼球飛出る樣見ゆる時は早速水換又は多量の指水を爲すべし若し惰る時は死するものと知るべし

問　血走り病は如何

答　本病は水腐敗の爲め又は入梅中霖雨の爲め或は虱の血液吸取りたる跡等より發するものにして病体は字の如く魚体の何れを問はず血を流したる樣見ゆるなり尤も之れは日當り宜き場所に置くときは一週間以内に治す

問　尾瘘病は如何

答　本病は魚の尾の附根の中心に虱固着し血液を吸取る故大切なる尾節の心經筋を痿縮し張の宜き尾も該難にかゝる時は直に尾張りを縮め魚の格好を失ひ衰弱して終に死すアギ腐レ病如何

問　本病は雛子に限り水腐敗の爲め夜中に發し一夜の中に死するなり傳染速かなる故よく注意すべし

答　脊干病は如何

問　本病は豫て虚弱の魚にして水面に浮上り背部を水面以外に出す故脊部を干し鱗を抜其跡肉靡爛し衰弱して死するなり

問　治療法如何

答　痛部へ唾を附け和三盆砂糖を度々塗り附くれは新鱗を生ずるなり但餌喰爲さゞる魚は効なきものと知るべし

問　不注意病とは如何

答　本病は病と云ふより寧ろ不注意の爲め魚を失ふと云ふ方當然なるべし

併し不注意病の原由は暮方に多量の食物を與へ又は泉水に分量より多數の魚を放ち或は水の腐敗等総て不注意より病發するものにして本病は夜の三時頃迄は異狀なきも四時頃より翌朝七時頃迄の内に泉水全部の魚死することあり

本病の有樣は魚水面へ口を出し空中の酸素を求むるもの〳〵如くして終に死す本病は人間の氣絶病と同樣にて一時の閉込みなるを以て假令死したりともまだ眼に光りあるものには兎に角冷水を以つて落水（器に水を張り之れに魚を放ち高き處より冷水を少し宛落すなり）を施すときは心臟に生あるものは二時間以内に全快するなり

総て本病に限らず魚の發病又は死するは必らず夜明け方より日出の頃迄と知るべし

其の故は水中に炭素と酸素のある事及び動物は酸素を吸ふと云ふ中点は泉水の問答中にも陳たる如し而して暮方に多量の食物を與ふる時は食物の爲めに酸素を失ふのみ

ならず魚は夜中に運動なさゞるが故多量の酸素を要するなり又泉水に分量より多數の魚を放つ時は即ち酸素に不足を生ずるが故魚は水面に口を出し空中の酸素を求むるの道理なり然るに空中は夜明方則ち午後四時頃より一般空氣不流通の時刻なるが故魚は彌々窮し終に死するものと知るべし

問　ペスト病は如何

答　劇烈なる傳染病なるが故項を分つて左に記す

第一本病の兆ある魚は食事を爲さず運動せず眼に曇を生じ魚体全部何となく色うつとりとするなり

第二眞實ペスト病となる時は尾鰭先共に腐敗を來し物に觸るれば筋のみを殘し肉は全く脫け去るなり斯くなる時は眼は煤色となり魚体の白色變じて灰色と化し赤色は節紺色と變じ且つ全身に糠を振りかけたる如く汚れを（是れ全く微菌なり）生じ口中より蛛網の如きものを呼き出し又鱗の間合よりヤニを吹き出すなり

斯くて病の輕重により二三日にて死するものあり又三十日位保つもあり若し治療其の宜しきを得て甦生するものは癒て黑ソブと變じ凡そ四週間乃至七週間位の內に全治す

又本病の氣味ある魚を壯健なる川魚類鯉鮒或は鯰等と同一の泉水へ一夜同宿さす時は翌朝に至り悉く傳染し第二

の如き姿となり居るなり

又本病は明治三十四年度初めて發見し其當時金魚營業者或は數代の愛魚家等へ照會成したるに何れも此の如き劇病は初めて承知したる旨の回答を得たり

又明治三十三年月日不明大阪毎日新聞紙上に東京○○池の鮒悉く死するを以て其筋より大學醫學部へ取調を命ぜられ云々同部は試驗の上一種の黴菌を發見し之れを鼠四正に喰はしめたるに四正の鼠は悪く死したるを以て鮒ペストと命稱したり云々と記せしことあり

治療法は第一の場合には立鱗病の治療法を施すべし第二の如きもの生じたる時は假令大切の愛魚たりとも直ちに取り捨つべし若し第二の如き魚を同一の泉水に置く時は他魚も皆失ふものと知るべし

本病にて死したる魚は其の體石の如く堅くなり之れを解剖して腹中を檢査する時は膽は黒色に變じ居るなり思ふに大熱病なるべし

又該病を煩ひし魚の居たる泉水は再三洗滌し而して晴天の日に二日間干し上げ再び之れを洗滌し又二日間日光に曝し其後魚を放つべし

問答

本病を發する原由如何

氣候の劇變又は過食或は水の分量より多數の魚を放つ等重なる原由なるべしといへども其他は所謂弱身に水溜る

○金魚問答

の道理にて他病より變ずることもありと知るべし

附記（有害苔藻類並に害蟲類は第二回水産博覽會審査報告）

有害苔藻類は笹藻（鮒藻）千枚藻（家鴨藻）蚊屋藻（網目藻）青ミドロの四種とす

笹藻類の發生は池水の變換を來し病魚を生ぜしむるの憂あり

千枚藻は浮草と稱し水面全体に繁殖する時は日光を遮り水質を變ぜしむ

蚊屋藻青ミドロは魚の游泳を妨ぐ魚兒小なる時は蚊屋中に入り纏繞せられ進退自由ならざるが爲め終に死することあり之れ等は皆其の蕃殖迅速なるを以て發見せる時は

○金魚問答

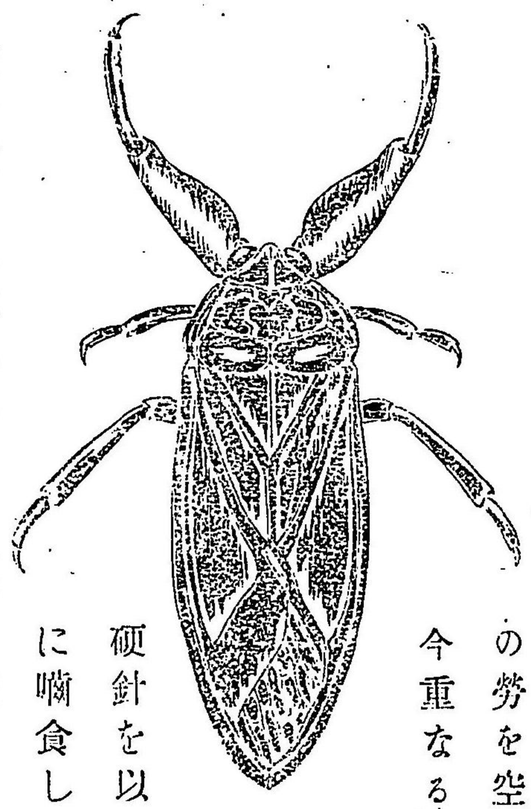
○金魚問答

直ちに除去せざるべからず

害敵中鳥獣の類は豫防の法容易なりといへ共蟲類を頗る難しとす被害も亦甚しとす育養家は最も驅除に注意せざれば終に其の勞を空しくす

るに至らん今重なる有害蟲を左に掲ぐ

第一　水蟬如圖



蛙挾み此虫は魚の

浮游を窺ひ硬針を以て刺戟し後ち忽ち嘴食し盡くす

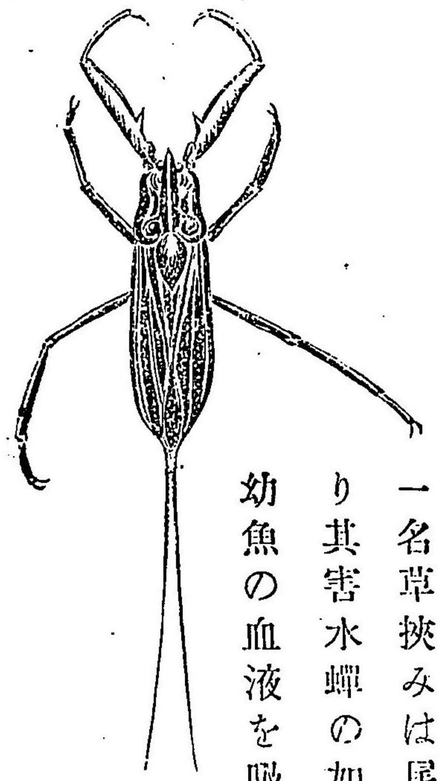
其擧動極めて敏活重に八歩以上のを魚害す晝間は飛去る

を以て拂曉其潛處を認め殺すべし

第二　水蟬の子なり

如圖

第三　尾長挾み如圖

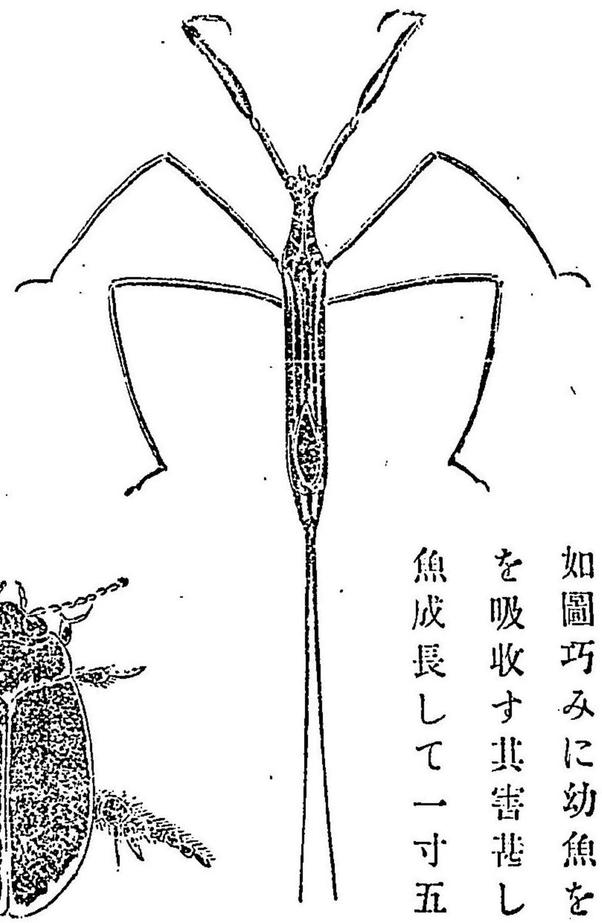


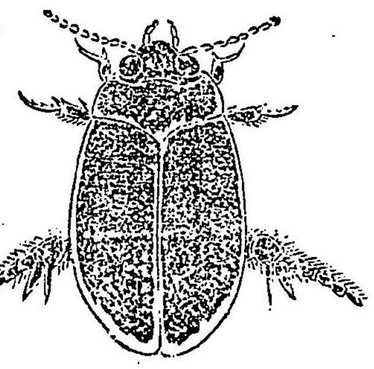
長く一種の臭氣あり其害水蟬の如く甚しからざるも幼魚の血液を吸收して死に致らしむ性稍々鈍なるを以て又た捕獲し易し

○金魚問答

第四　太鼓打
捕獲し血液
といへども
六歩に至れ
ば害を免る
驅除法は拂
曉注意して
前掻を以て
掬ひ捕るに在り

第五　源五郎如圖六七月に至りて多く飛
來り魚餌を掠食するのみならず少しく

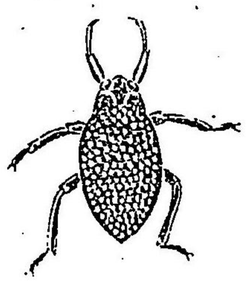




如圖巧みに幼魚を
を吸收す其害甚し
魚成長して一寸五

衰弱したる者あれば直ちに之れを斃し喰ふに至る然れど
も其害甚しからず

第六　小挾み如圖此
しといへども魚餌
可とす

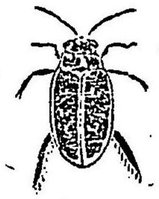


驅除法も又容易なりとす
の蟲は害を加ふること少
を喰ふを以て除去するを

第七　牛房種如圖は

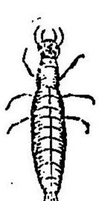
小挾みと同樣なり
別に害を與へざるも一朝
成長せば則ち第九の如く

第八　西瓜種如圖は



地塘に産卵し孵化
なり其害甚だし

第九　ヤモメ如圖は



西瓜種の子にして育養家
の最も恐るゝ有害物にして其發生の時期は金魚の孵化期

と同じく一夜の中るゝことあり

第十　蛙如圖は魚の
る時又は游泳遲な
食す故に良品は常
べし

第十一　水蛭如圖は
光澤を失はしめ幼
るに至る魚の片眼或は盲目なるものあるは重に此の害を
被ふるに因る

に幼魚は滅盡せら

池邊に食餌を求むるこき一躍して呑に金網を蓋ひ置く

血液を吸收し魚の
兒は爲めに斃死す

第十二　魚虱如圖は
液を吸ひ魚を疲弊
歯等生ずるを以て

魚体に固着し吸盤を以て血せしむ而して其の傷部に黴終に死に致すことあり概ね

鰭尾又は頭部に多く固く固着す甚しきに至りては口中に多數固く吸着し爲めに食餌を飲くものあり其の被害は魚の成長するに從て甚しとす之れを退治するには種々なる方法ありと雖ども左の二法を容易なりとす

第一　大虱を驅除するには毎日中に黒色の器へ魚を入れ見るべし若し虱見當るときは先づ茶碗に熱湯を入れ置き魚を捕へ毛拔にて虱を挟み備置きたる熱湯中に振ひ落すべし

第二　小虱發生する時は魚体全部に固着し居るも肉眼にて見る能はざるものあり此の場合には手拭を水に浸し堅く搾り之れにて魚体を拭ひ而してアルコールを刷毛にて魚体に塗抹（眼に塗らざる樣注意すべし）し直ちに水中に入洗ふべし斯くする時は虱は水中に放るゝなり該水は直ちに取捨て又器も魚一尾毎に能々洗滌し用ふべし

雜話

さて金魚を我國に發見したるは前に述たる如く文龜年間に左海の浦に於て和金を見たるが初めてであります爾來養育して元和年中に尾長を得其後種々の工夫と經驗とにより天和の頃蘭鯱を造り出し又天保年間に至り和蘭陀獅子頭を得たる順序であります斯の如く經歷を以て種々と美術の魚を造り出したるものなれば之れを飼育するに至ては餘程注意せんければなりません

玆に美術飼と憔悴飼（一名素人飼）との二樣がありますが其の美術飼の心得は問答中に委しく述ましたれば今玆には必要はありません

併し美術飼と申すは凡そ天の與ふる發育程度迄泉水にて飼育するを云ふ當歳子にして極骨太の魚なれば目方十四匁以上に達するものあり此の塲合には魚は胴短く充分肥滿し實に美麗なる姿となるものであります

又憔悴飼と申すは水に分量より多數の魚を放ち又た水換を怠り餌も不充分に與ふる等を云ふ斯くの如く取扱ふときは恰好を失ひ宛も鮒の如き姿となり當歳にて量目凡そ四五匁まで進むもの普通に上出來と云ふ位であります

又發育の点のみにて申せば水田或は泥池等へ魚數少く放つ時は自然當歳にて量目四十目以上に進むものも有りますが之れは我儘姿に延る一方にて魚に風致も見識もなし之れを通稱池のもの（泥池飼と云ふ意なり）と申して前記の泉水（塗池或はタヽキ池とも云ふ）にて美術飼と爲したる魚抔とは迚も比較が附ません恰も憔悴飼の魚を野生の松とせば美術飼の魚は盆栽松の如き相違あり是は唯飼育の良否に依り魚に優劣を來すと云ふ点であります

又茲に國々の流行と云ふ事に付きまづ東京は蘭鱗に流金が流行し名古屋の如きは專ら和金を愛す又大阪は蘭鱗に和蘭陀獅子頭を好むといふなどの点につきましては別段申すことはありません

唯だ種類の何たるを問はず金魚其物の成立より研究して自國の流行不流行に拘らず優劣を定むるは當然の事であらふ

と心得ます

假令は或國の蘭鱓は体格にのみ重きを置き班の点は少しも頓着せぬとか又或る國にては狐頭（一般不可とするもの）にして胴長き（是も不可）もの流行すとか又は班の点も唯一見美麗なるを可とすとかいふ如き少しも根の立たざる撰み方では所謂我田引水甲論乙駁銘々大將にては廣く品評し實際優劣を定め共に研究して改良を圖る等の事は出來ません

又大阪の如きは体格に重きを置くは勿論にして班と云ふ点に極々重きを置くと申します

故に毎年數度の品評會を爲し之れに相當の規定を設け青子の時は体格優劣の撰定又た變色すれば班の品評其他赤無地

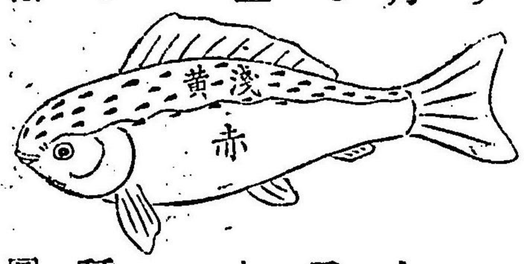
會或は親魚會等其時々優劣の結果を番附表にして顯すが故前會の劣者は後會の優者となり益々研究して美術の魚を作り出すと申ます

此場合を考ふるに金魚を一の美術品として樂むときは大阪の流行を當然と信じます

既に明治三十三年十二月十四日附大阪毎日新聞紙上に諸國物語と題して香川縣高松の栗林公園の池には一尾一千圓以上と云ふ稀代の鯉が居る云々記載しありましたが

是の鯉は三色鯉と申して種々の三色があります

併し合格の三色鯉と云は圖の如く腹部半体を赤



くし背部半体を淺黄色とし尚ほ其淺黄色の中へ黒点の着きたる魚を最上と致します又何故此の鯉を一尾千圓以上の價値ある乎と云ふにこの魚發育するに隨て腹部の赤色變じて白色となるもの多くして彼の公園の如き壹貫目以上の魚は實に稀物にして一尾千圓以上と云ふも決して無理はありません

右の如く一尾千圓以上抔と申すは何が故で有るかといへば唯だ色合の稀有なる魚と云ふに外ならず若し之れを普通の緋鯉として評するに假に二貫目の大鯉として時價百圓十五錢と積るも三圓の價額にしかなりません

○參考の爲め大阪の班紋撰定方の大略を左に申し陳べます

口　眼巢　鬚　兩顎赤きものを頭道具揃と云ふ

六枚の鰭皆赤く尚全尾赤きものを本六輪尾紅と云ひ又以上の頭道具並に本六輪尾紅の揃ひたる魚を稱し本國錦と名稱して最も賞讃致します

予は大阪金魚大會の席上に於て同地の愛魚家諸氏に向て若し本國錦の生じたる時には幾何の價額ある乎と問ひたるに魚体合格（獅子頭にして丸形に肥滿し丸金丸尾と云ふ意なり）の魚なれば雄雌二尾にて五拾圓は下らざるべしとの衆説を予も至當の説否低評なりと聞取ました

彼の本國錦と稱する班は實に班の土臺と爲るべきものにして一見美麗と云ふでは在ませんが寧ろ殺風景と云ふ方が適當

かも知れませんが併し彼の本國錦と稱する班を貴むは餘程の理由があります

全体金魚は前にも述たる通り赤色を本旨とし白色の魚を銀魚と申ます赤色は即ち陽の色にて白は陰でありますス之れを魚体に取りて申さば背部は陽腹部は陰故に普通金魚の班は背部に赤色を帶び腹部は多く白色で是則ち体の陰陽に其色を配合した理合で別に可も無く不可もなしと云ふ班であります之れに反し彼の本國錦の如きは陽の部に陰の色陰の体に陽の色を置き頭道具は要部のみを赤くし六輪尾紅の如きは最も陰部の末端なり全部赤無地の魚にても鰭先尾先は多く半白にして全鰭全尾赤きものは稀に見るものなるに拘らず彼の本國錦は兩部共端末まで赤くなりたる抔は實に賞讃すべきでは有ませんか若し斯樣の魚生じたる時は彼の五十圓との評高價では在ますまい

併し本國錦の如きは前に申すと通り美麗と云ふ点に重きを置たるものに非らずして實は出來難き班の若しも生じたれば云ふ無理な注文であります故にもし本國錦にして約束の外に餘計の赤色あるか又は一ヶ所にても赤色を欠ぐか兎に角本國錦の定則に違ふ魚は五十圓はさて置き五圓も覺束なしと云ふ位の比例であります

○又此外美麗と云ふ点に重きを置たる立波鹿の子などゝ云ふ班に至りましては彼の本國錦を土臺として別に兩腹部より

尾筒の邊りまで立波の如く赤色巻き揚げたる班であります
勿論此魚なども滿点を得るもので有ますが併し此の班抔に
至りては假令該色合の外或は赤色多きも又或る個所に赤色
欠ぐるも相當の減点を爲し譬へば口紅なき爲め何点引き又
は尾先白き故何点引と斯様の比例を以て相當の等級を與へ
ます
○又藥品を用ひて赤色を抜き取白班を製造する法が在ります
併し此の藥品は猥りに使用するもので在りません如何なる
場合に用るかと云ふに彼の本國錦の如きもの假令は眼と髭
の間に少しの赤色あり爲めに本國錦の資格を得る能はず遺
憾千万と云ふ如き場合に彼の藥を使用し不用の赤色を天然

白色の如く抜き取り眞の本國錦を造る等が彼の藥使用の本
分であります
○又該藥品を用ふるは餘程面倒なるものにて先づ魚毎に藥を
用る日頃に相違あり殊に用る當日に刻限あり水に溫度あり
且用ゆるに方法あり魚体の場所に依り難易あり後日の養生
法あり是等の要点を充分會得し術を施さんければなりませ
ん
若し不熟錬にして前法を施すときは大失敗を招く事があり
ます其失敗と申すは外でありません藥にてぬき取りたる跡
に多く薄紫或は黄色等を殘します之れを筆物（藥にて班を作りたる卑劣手段なりと云ふ意なり）と稱し幾等上等の魚にても筆物と云ふ一点の疵の

爲め愛魚家は之れを廢物として風上にも置きません
全体藥を川ふると云ことは愛魚家の堅く禁じて居る處で勿
論天然に出來得たる班でこそ奇と云ひ妙と稱し之れを美術
として愛するのでありますから
若し人造物とせば如何なる班にても愛するの價値は少しも
有ません

美術魚取立の困難と云ふ點を蘭鱓魚に附て說明致します
先つ雛子發生の當時之れを一萬尾の魚と假定して數回の
撰別に於て畧ぼ左の結果を得ます

第一回（發生後凡十日目）

第一（魚虛弱にして既に死去したるもの並に虫害の爲め斃死したるもの）凡三千尾
第二（尾先腐敗したるもの及び鮒尾の類にて取り捨るもの）凡三千尾
第三（背曲りたる魚或は水面へ浮ぶ魚又は俯向き其他虛弱にして發育の見込なきもの）凡千尾

殘魚三千尾となる

第二回（十五日目）

第一　前同樣
第二　尾不具なるもの及尾先腐敗したるもの　凡千尾

第三　前同樣　凡三百尾

殘魚七百尾となる

第三回（二十日目）

第一　前同樣　凡百五十尾

第二　前同樣　凡百五十尾

第三　前同樣　凡七十尾

殘魚三百三拾となる

是より黄身餌を廢止し他餌に換るなり

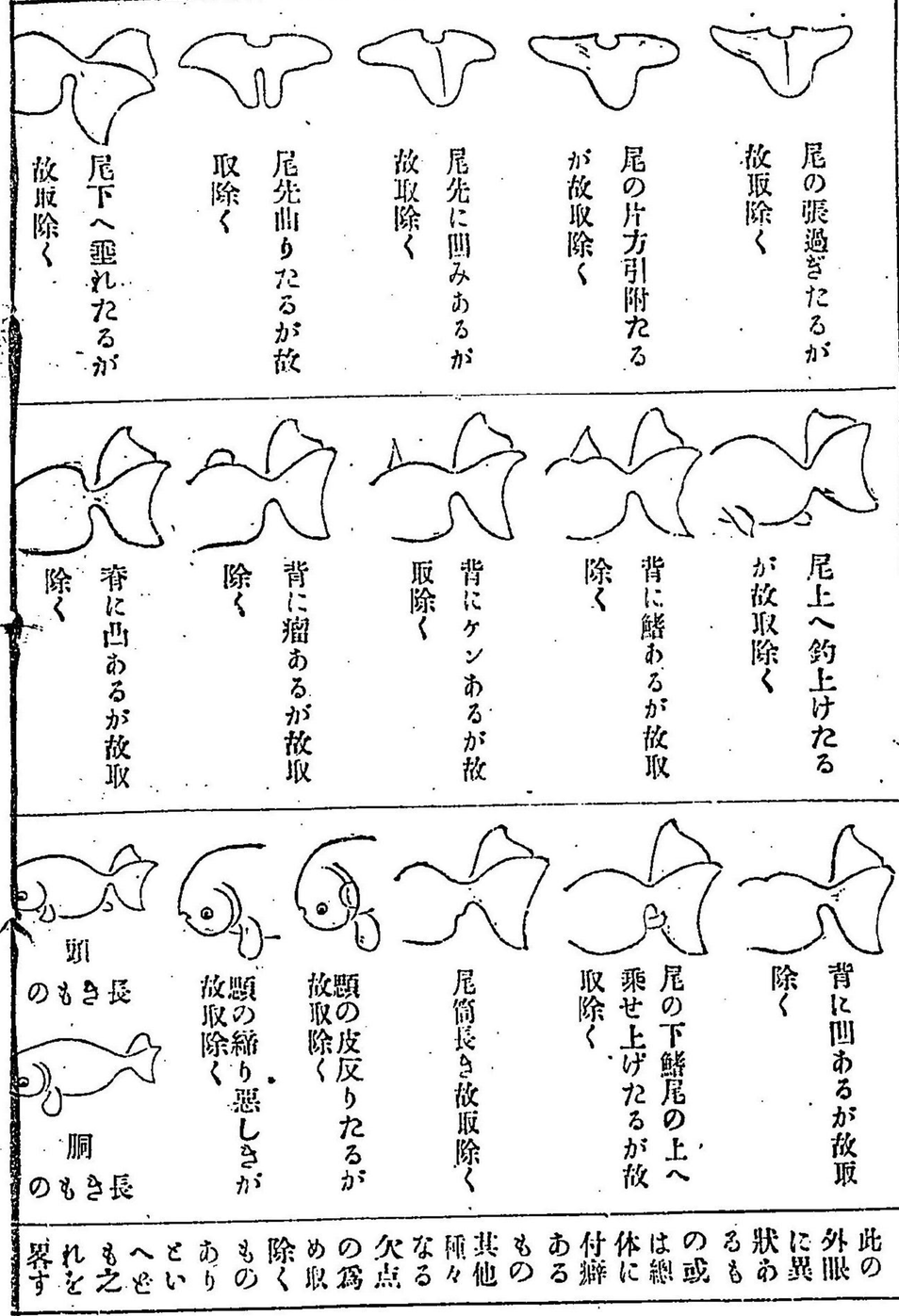
第四回の撰別に（廿五日目）　殘魚凡二百尾

第五回の撰別に（三十日目）　殘魚凡八十尾

前記の如く第五回の撰別に百分の一弱の殘魚となる勘定なり扨て此の時魚は飯粒位の格好を造り今後虫害を免れ飼育に注意すれば自ら斃死するものは無くなります

而して前記の如く一万尾の魚を八十尾までに撰み分けたるものなれば將來飼育其宜しきを得ば皆々美術の魚となるかと申すに復た決して左樣でありません

是れ迄は唯不具なる魚を取除きたる迄にして將來の撰み方は左記圖の如きもの（水を換ふる度毎に現るゝ者なり）を取除き變色の時期土用前（魚一尾の量目凡そ十匁内外となりたるもの）迄撰別するときは殘魚三尾乃至五尾位（之れも申分なき魚計りとは參りません）留まります



此の外眼に異狀あるもの或は總體に付癖あるもの其他種々なる欠点の爲め取除くものありといへども之れを畧す

前記の如く一万尾中より体格撿査に合格したるもの漸く三尾乃至五尾に過ぎません併し此の魚に今一ッ變色と云ふ關門を通り抜けんでは全く美術の免許は得られませんこの變色も體格の歩留りと略ぼ同樣にて美術免許を得る魚は萬に一ッと云ふ位でありまして其色の合格を得る事の六ケしき事は變色の部に於て申しましたれば茲には畧します

參　考

寛政年中金魚の如何なるものを賞翫せしか安達喜之が金魚養玩草に載するものを見るに左の諸種なり

一圖のごとく四ッ尾開きて尾の付根より四五歩計り金の鱗付たるを丸金と名付け上品とす又一寸四五歩も金の鱗脊へのぼりたるを長金と名付上品とす

二圖の如きを三ッ尾とし尾傾きなく丸金なれば上々とす又長金を中とす脊鰭少さきは悪し又大阪にはつまみと名付てよしともするなり

三圖の如く四ッ尾にして善く開き尾の付根の中央より尾出で丸金なるを極上の稀品なり

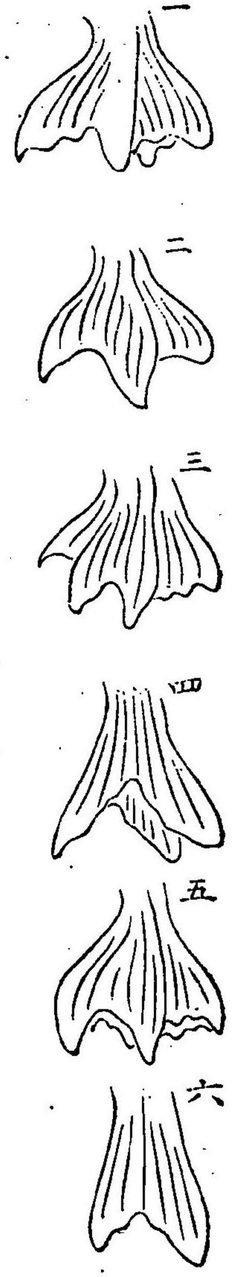
四圖の矢尾は矢はづに似て中の尾ひつたりと付き素直なるを上品とす餌人の好不好にもよるべし

五圖の房尾は常の魚より尾少し長し水中を泳ぐ時は房の如くに見へ休む時は心よく開く故上々とす

六圖の鮒尾は下魚なり飛金狹金無金班尾付何程よくとも下魚なり是を俗にじやみ魚と云ふなり

されば鮒尾を除くの外は皆當時の優品にして又此外にも海老尾両ばね片ばね大開中開前開指尾四蒲菊葉獅子尾揚羽蝶と云ふあり此魚は色濃く朱を塗りたる如く向ふェラ格別大にして一重に蝶に似たりと又箱尾と云ふものは尾の小口より見れば四角の如くなり又郭公三ッ尾あり中の尾格別長く

して郭公の尾によく似たり又八丈とは赤白黒三色の島惣身にあり又獅斗尾鮒尾にして前揃て尾二枚重りて獅斗に似たる故名付けたり以上列擧の諸種に據れば當時は班文に據らずして其尾の形狀に據りて高下の品評をなせしと見えたり



又支那に於ては金魚を六種に分ちて第一をらんちうとて腹部をあげて水底に潜み或は水面に浮游するをいひ

第二種は龍眼とて眼大にして突出したるものを云ひ此魚一尾の價二十圓に下らずとぞ

第三種を懶魚とて游泳せずして多くは水底に潜みて水面に浮泳せざるものをいひ

第四種を飛躍魚とし斜に水上に飛躍すること鯉の如きを云ふ

第五種を嬌魚とて其嬌柔にして能く泳ぐをいふ

第六種を字魚とて其色金光に似て支那字の如き黒班あり北京の金魚商は魚鱗に黒字を作るは秘傳ありといひて之は化學的の作用にして或藥品に據りて之を行ふといへり

金魚問答 終

明治三十六年五月二十三日印刷
明治三十六年五月二十八日發行

不許複製

著作者　三好晉次郎
鳥取縣西伯郡米子町大字道笑町六十三番屋敷

編纂兼發行者　又間安次郎
大阪市南區安堂寺町四丁目二百卅二番邸（電話東三三六三番）

印刷者　本田恒市
大阪市南區心齋橋通一丁目六番邸

正價金參拾錢

發賣所　大阪市心齋橋通安堂寺町西へ入　又間精華堂
同　大阪市南區御藏跡町　大鮫梅太郎

頁數	行數	誤	正
序文一	五	つよてハ……	よつて……
凡例一	二	闘するハ……	關する……
仝一	九	逃べハ……	逃べ……
二	六	呼ぶするより……	呼ぶより……
七	四	兵淺ハ……	丘淺……
七	七	でありあり……	でおり……
八	六	本行より次行に綴くを誤つて一斷句したり	
一四	九	嫗筒ハ……	尾筒……
四四	六	多川ハ……	他用……
四八	五	雌の如きハ……	鮒の如き……